

回 答 書

受付番号	回収年月日	回収場所	担当主管課
第2号	令和6年4月5日	伊予市役所	産業建設部 環境政策課
題 目(テーマ): 伊予灘におけるブルーカーボンの実行について			
提 案 理 由(要旨)			
森林などが吸収する Co2 を「グリーンカーボン」と呼ぶのに対し、海藻などの海の植物によって海中や海底に吸収、埋没される Co2 のことを「ブルーカーボン」と呼びます。この言葉は 2009 年の国連環境計画(VNEP)の報告において命名され世界的に注目が集まるようになりました。このブルーカーボンが注目される最大の理由は海洋における Co2 の吸収量の多さにあることです。陸上の森林に比べて単位面積あたりの吸収量が 2 倍以上という調査結果もあります。 伊予市においても 2050 年カーボンニュートラルを達成するためには、ブルーカーボンの取り組みが必須かと思われます。現在、南予地域では養殖業が盛んであることから取り組みが開始されていると言われていますが、伊予灘でも藻場が多々あるはずです。森地区にある愛媛県農林水産研究所でも調査・研究を既に実施しているのではないかと思います。方向づけできれば漁業組合側と連携し実行願いたいです。(参考:添付資料)			
回 答 内 容			
この度は、「伊予灘におけるブルーカーボンの実行について」貴重なご意見をお寄せくださいましてありがとうございます。 ご提案のブルーカーボン事業は、「大気中の CO2 が光合成によって浅海域に生息するブルーカーボン生態系に取り込まれ、やがて枯死した海藻などが海底に堆積し、底泥へ埋没し続けることや、海藻の葉状部が潮流の影響により外洋に流され、水深が深い中深層に移送され、分解されながらも長期間留まることによって CO2 が隔離・貯留される」とことと捉えております。 ご提案のありました、専門機関などの研究等につきましては、確認したところ、ブルーカーボンと題した試験研究は東予の海苔や南予の魚などの養殖で行われており、これらは比較的低コストで運用でき、海藻のついた資材等を深い海に沈めることがCO2 を閉じ込める			

ことに繋がることから、近海の水深が深いなども条件となるようです。

一方、伊予市近海は荒天時に筏を守る内湾や入江がほとんどないことから養殖業が盛んではなく、比較的水深も浅いため、ブルーカーボンの付着した資材を海に沈めることで船の往来に支障をきたす恐れがあり、ブルーカーボンの調査研究は進んでおりません。そのため、現時点ではブルーカーボン施策の具体的な計画はございませんが、愛媛大学、県、国内外の企業、県内の他市町と連携し、「愛媛脱炭素・バイオマス地域循環共生圏協議会」が設置されており、その協議会などの機会を利用してブルーカーボン事業の可能性を検討し、将来的な可能性を探っていきたいと考えておりますので、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。